

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370297

研究課題名(和文)シェイクスピアの異性装上演における観客：異性配役の生む「笑い」と「魅力」

研究課題名(英文) In search of the audience in cross-gendered Shakespeare productions: 'amused' or 'enchanted'?

研究代表者

阪本 久美子 (HILBERDINK-SAKAMOTO, Kumiko)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：50319240

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：舞台上の役者が登場人物を具現化する際、役者の性が登場人物の性と異なると、観客は性別の「ずれ」を認識することになる。これが、異性配役という趣向により生じる独特の効果として現れる。本研究では、シェイクスピア作品上演における観客側、つまり受容側を研究対象とし、受容における異性配役の効果を検証した。特に、異性配役が誘発する観客の「笑い」、異性配役が醸し出す「魅力」に着目し、基盤となる文献調査から始まり、ファンクラブへの調査、観客インタビューを含めた実地調査を実施した。その結果、異性配役に関する観客論を実証的な方向で発展させ、本来捉えどころがない観客の実態を把握する上での有意義な考察が行われた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at investigating a discrepancy in the audience's cognition when Shakespeare productions are performed with cross-gender casting both in Japan and the UK, focusing on two types of effects caused by this discrepancy on the part of the audience: simply amused or utterly enchanted. Research has been conducted to understand the nature of a collective called the audience through interviews, surveys or even participation in fan club events, in addition to more traditional approaches to the topic through written documents and also inevitable visits to theatre and analysis of recorded performances. As a result of these empirical methods, the audience becomes more than an elusive entity beyond our grasp, but something with certain collective tendencies in cross-gendered theatre.

研究分野：初期近代イギリス演劇

キーワード：シェイクスピア 上演研究 観客論 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 2011年度から2013年度の科学研究費助成事業、「異性配役の身体を探る：オールメール・シェイクスピアからプロペラまで」において、近年のイギリスおよび国内の異性装上演の実態を調査し、シェイクスピアのテキストにより表象される登場人物と、登場人物を演じながら観客の前に物理的に存在する役者の性別が異なった場合の上演を検証した。その結果、演劇成立の構造を説明する既存モデルにおける二者、「役者」と「登場人物」の関係は解明できたので、残る第三の構成要素である「観客」、つまり受容側に焦点を移した研究が必要であると考えた。

(2) 日本では異性配役上演、異性装を含む公演に人気があり、異性配役を専門とする劇団(宝塚歌劇団、OSK日本歌劇団、劇団スタジオライフなど)から、異性配役に特化した公演シリーズ(彩の国さいたま芸術劇場シェイクスピア・シリーズの「オールメール・シリーズ」、柿喰う客の「女体シェイクスピア」シリーズなど)、異性装で舞台に立つ役者(美輪明宏など)が存在する。したがって、アンケート調査や観客インタビューなどを実施して検証する対象たる公演が多数あった。また、異性配役上演の人気の背景には、劇団のファンクラブや役者個人のファンクラブが存在している。したがって、ファンクラブという観客の共同体の調査が可能であり、その調査が観客像解明の手掛かりになると考えた。

(3) イギリスでは過去20年間で、オールフェイメル上演やオールメール上演、一部役者の異性装上演など、異性配役による登場人物表象が増加傾向にある。しかしながら、ファンクラブの存在は耳にしたことはなく、また異性配役を専門とした劇団の歴史も浅い。それゆえに、日本とは異なった異性配役上演の観客を取り巻く状況がある。

(4) 一口に異性配役と言っても、女装と男装、オールフェイメルとオールメールでは、上演における意味の形成と、それによる意味の伝達としての受容が異なっている。また、ファンクラブという形で観客の共同体を作り、一定の、つまり女装または男装を含む上演のどちらかを支持する傾向がある。つまり、異性配役の人気と言っても、女装と男装の間で明らかな分断が存在する。

2. 研究の目的

(1) 一過的な集団として掴みどころのない観客を実証的に研究すること：演劇における観客論と言えば、ベネットやカールソンによる理論的研究はあるが、演劇作品鑑賞のために、その日、その場にたまたま集結した鑑賞者である観客の実態は非常にとらえにくい。したがって、実証的な観客調査、アンケートやインタビューと言った方法を試み、異性装上演における観客の実像に迫る。

(2) 異性配役における笑いを分析するこ

と：異性配役は観客とのラポールを作りやすい装置であり、演技者と観客をつなぐ鍵ともなりうる笑いを誘発しやすい。ところが、実際には笑える異性配役と笑えない(笑ってはいけない)異性配役が存在する。つまり、上演側の意図が笑いを求める場合とそうでない場合が存在するが、必ずしも意図どおりの反応は期待できない。笑いに関する理論を踏まえて、役者の演技に対する観客の反応を分析する。

(3) 異性配役の人気を探ること：特に日本において、異性装上演が盛んであるということに注目し、その魅力を解明するために、ファンクラブという観客の共同体を調査したい。研究対象となる宝塚歌劇団、蜷川幸雄演出の彩の国さいたま芸術劇場シェイクスピア・シリーズの「オールメール・シリーズ」、劇団スタジオライフ、D-ステ(旧D-BOYS)には、劇団全体および団員である個々の役者のファンクラブが存在する。異性配役人気から予測される、異性配役ゆえの魅力を解明するために、ファンクラブという観客の共同体を調査し、ファンの存在、異性配役上演の人気の背景を検証する。

(4) 女装と男装の違いを観客面から解明すること：日本およびイギリスにおいてオールフェイメル上演が多様化している。中屋敷法仁主催の劇団柿喰う客は、「女体シェイクスピア」シリーズと銘打ち、現在まで8作のシェイクスピア作品を女優のみで上演してきた。また、イギリスでも、ドンマー・ウェアハウス劇場にて女優のみによる『ジュリアス・シーザー』(2012年、フィリダ・ロイド演出)(後に『ヘンリー4世』、『テンペスト』も含めてシェイクスピア・トリロジー上演)が上演された。ロンドン・グローブ座においても、女優のみによる『じゃじゃ馬馴らし』(2013年、ジョー・マーフィ演出)が上演され、日本とイギリス両国において男装も増加傾向にあり、女装と男装の場合を比較した観客調査も可能になった。

3. 研究の方法

(1) 初期調査として、観客・観客論、ファンクラブおよび演技・演技論、笑いやユーモアに関する文献調査を行った。文献調査は、やがて歴史的にも地理的にも広がり、日本とヨーロッパにおける社会的背景や文化に関する文献も幅広く扱うことになった。

(2) 日本およびイギリスにおける異性配役上演の視察、および上演録画の視聴を行い、観客とのコミュニケーションとしての演技の分析を行った。また、公演に関する資料(劇評や上演台本、劇場のショーレポートなど)を閲覧した。

(3) 異性装上演およびDVD視聴会において、偶発的に集まった個人の集団である観客の、集団としての傾向を理解するために、アンケート調査および観客インタビューを実施し、結果を分析した。

(4) 劇団や役者のファンクラブに入会したり、会員への伝手を利用し、ファンに関する実態調査を行なった。また、ネットに公開されているファンによるサイトやファンを対象としたサイトなど、オンラインの調査を行った。

4. 研究成果

(1) 日本における調査

『ロミオとジュリエット』を原作とした、宝塚歌劇団月組によるミュージカル版『ロミオ&ジュリエット』(2012年、小池修一郎演出)のオールフェイェイル上演のDVD視聴によるアンケート調査、劇団スタジオライブによる『夏の夜の夢』のオールフェイェイル上演(2015年再演、倉田淳演出)のアンケート調査、彩の国シェイクスピア・シリーズの『ヴェローナの二紳士』のオールフェイェイル上演(2015年、蜷川幸雄演出)などにおいて、アンケート調査、また観客の一部に対してインタビュー調査を実施した。SurveyMonkeyを利用した調査により、アンケート項目や質問の仕方の改良を重ね、観客の全体像が解明できるように工夫を行った。

アンケート項目の数が多すぎたため、また自由記入型の質問も併用したため、統計学的解析はできなかったが、手作業で整理を行うことにより質的な分析は可能であった。その結果、ファンの固定化やいわゆる「お約束事」を遵守する、役者にとってフレンドリーで御し易い観客像が浮かんだ。異性配役はもともと第4の壁を破り、観客との対話やラポールが可能な装置であるため、異性配役上演の観客、特にファンとなり何度も劇場に足を運びリピーターと、たまたま1回の上演を観劇した観客との間に大きな差が存在することがわかった。

アンケート調査、聞き込み調査でも、この点は顕著で、たとえば宝塚歌劇団のファン、つまり男役のことを男性として見ることを当たり前の「お約束事」と理解した観客と、初めて男装した女性を見た観客の間では、反応が異なっていた。概して、ファンは上演自体に集中する、つまり異性配役を当たり前のことのように「無視して」、人物表象の巧みさも含めた公演全体の評価を行う傾向にある。一方、宝塚初心者は異性配役自体の持つ特殊な効果に対して新鮮な驚きを感じる傾向にあった。そのため、異性配役の魅力自体が観劇における焦点となり得た。

ファンの固定化という点では、劇団スタジオライブの場合が良い例である。スタジオライブのファンクラブ、「クラブライブ」に入会し、ファンクラブ運営の仕組みを調査した。会員特典として、先行予約、会員価格でのチケットの販売、会誌の発行に加えて、誕生日にはファンが選んだ役者からプロマイドとメッセージが届き、役者たちとのバスツアーなどの交流会も企画される。結果として、固定ファンに支えられた現在の劇団経営に行

きついたわけであり、それが実際の上演という場において反映される仕組みが理解できた。これは、宝塚歌劇団の新人団員へのファンによる入れ込みとも似ているが、スタジオライブによる個々の公演は、初演から千秋楽までファンである観客との相互作用により、発展・変化を遂げる。アンケート調査の項目にも含めたが、1公演についてもリピーターが多い。劇団側も、団員を2~3グループ(チーム)に分けて、同じ登場人物を別の役者に演じさせることにより、観客が何度も同じ公演を観劇することを促している。

このような観客参加型的な傾向を一つの手法にしたのが、中屋敷法仁による「女体シェイクスピア」シリーズというオールフェイェイル上演だ。その上演形態には、「乱痴気」と呼ばれる配役交換上演が含まれる。配役交換は、観客による投票に基づいて行われる。つまり、演出家によって行われたキャスティングとは異なるキャスティングを観客が希望し、それを舞台上で実現するという趣向だ。特定の役者による特定の登場人物の表象を見たがるということは、日本の異性配役上演の特色である。つまり、観客は役者を見に劇場に来ており、登場人物を介しているが、より直接的な関係が成立しているのだ。

スタジオライブでのアンケート調査の際に、敵意むき出しの記述が数件あったことも興味深い。すべてのケースが、長年のファンによるものであり、調査という名で劇団やお気に入りの役者を客観視しようとする試みへの嫌悪感と思われる。特に、私が劇場に赴き、実際にアンケート用紙を配布した日に、攻撃的な記述が集中した。固定ファンから見れば部外者であることは一目瞭然であり、それでいながら劇団員と話をしているところを見れば、劇団の公演を長年支えてきたファンとして怒りが抑えがたかったのだと考える。多少排他的になるのは小劇場ファン特有の現象かもしれないが、実際には日本の観劇人口の固定化という現状があり、それゆえ日本の劇場はイギリスと比べると閉鎖的な空間となっている。たとえば、日本では演劇の観客は、流動性のある映画の観客から分離傾向にある。マスカルチャーとしての映画文化の観客とは異なり、舞台芸術という身体的に空間と時間を共有する集団を形成することは、日本のいわゆる「アイドルカルチャー」のアイドルとファンの関係に似ており、文化的な特殊性な現象だ。以上のことから、サブカルチャーに関する文献への調査も行った。

観客とファンの調査として、インターネット上の記述が大変役にたった。固定劇団のファンや演劇ファンによるブログは、観客像をつかむ上での貴重な情報にあふれている。そして、誰もが自由に発信できるというソーシャル・ネットワークのおかげで、ファンの共同体化がさらに進められた仕組みがわかった。また、本研究を進める途上で、「観客発信メディア WL」のようなサイトも開設され、

観客の存在がさらに前面に押し出されたとも言える。研究者による投稿が多いが、イギリスと異なって劇評の発表が少ない日本において、貴重な資料として参考になった。

オールフェイメル上演(彩の国さいたま芸術劇場シェイクスピア・シリーズ、スタジオライブ、花組芝居、D-ステ、歌舞伎など) オールフェイメル上演(宝塚歌劇団、柿喰う客) 部分的に異性装による上演(美輪明宏出演作品など) 男女配役交換上演(『夜の姉妹』上演など) を視察した。助成事業の期間には、彩の国さいたま芸術劇場のシェイクスピア・シリーズは、『ヴェローナの二紳士』のみがオールフェイメル上演であったが、劇団柿喰う客の「女体シェイクスピア」シリーズでは、『暴走ジュリエット』(2014年)、『迷走クレオパトラ』(2014年)、『完熟リチャード三世』(2015年)、『艶情 夏の夜の夢』(2016年、全て中屋敷法仁演出)を視察することができた。また、異性配役上演での上演作品の通常(男女混合)上演も、比較のために視察した。例えば、三島由紀夫作『黒蜥蜴』の美輪明宏演出・主演公演の再演(2015年)と、異性配役を含まないSPAC版(宮城聡演出、2016年)を視察した。

(2) イギリスにおける調査

2015年2月26日~3月7日までイギリスのストラットフォード・オン・エイボンとロンドンに出張し、最新の文献や上演資料を調査した。ドンマー・ウェアハウス劇場における『ジュリアス・シーザー』のオールフェイメル上演(2012年、フィリダ・ロイド演出) 劇団プロペラによる『ヘンリー5世』のオールフェイメル上演(2014年、エドワード・ホール演出)などの上演録画、および上演資料を閲覧した。また、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの最新シェイクスピア公演、『恋の骨折り損』、『から騒ぎ(恋の骨折り甲斐)』(ともにクリストファー・ラスコム演出) ピーコック劇場のダンス版『ロミオとジュリエット』(ラスター・トーマス演出) グローブ座のサム・ワナマーカー・プレイハウスの近現代演劇の公演などを視察した。

2016年2月27日~3月7日には、ロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館ブリスハウス資料室にて、異性配役上演作品、ドンマー・ウェアハウス劇場の『ヘンリー4世』(2015年、フィリダ・ロイド演出)および異性装の女性が宝塚風に演じられた近現代演劇作品『女番長またの名女怪盗モル』のロイヤル・シェイクスピア・シアターによる上演(2014年、ジョー・デイヴィス演出)といった過去の異性装上演作品の上演録画や資料を閲覧した。グローブ座資料室では、オールフェイメルの『ヘンリー5世』(1997年、リチャード・オリバー演出) オールフェイメルの『じゃじゃ馬馴らし』(2013年、ジョー・マーフィ演出)の上演録画および資料を閲覧した。また、グローブ座のサム・ワナマーカー・プレイハウスにてシェイクスピアのロマ

ンス劇4作、『冬物語』(マイケル・ロングハースト演出)、『シンペリン』(サム・イエイツ演出)、『ペリクリーズ』、『テンペスト』(ともにドミニク・ドロムグール演出)の上演、ナショナル・シアターにて『お気に召すまま』(ポリリー・フィンドリイ演出)などを視察した。

2016年10月31日~11月6日には、ロンドンのキングスクロス特設劇場で上演された、ドンマー・ウェアハウス劇場のオールフェイメルによるシェイクスピア・トリロジー上演、『ジュリアス・シーザー』、『ヘンリー4世』、『テンペスト』(全てフィリダ・ロイド演出)を視察した。また、オールド・ヴィック劇場にて、女優グレンダ・ジャクソンが老王を演じた『リア王』(デボラ・ウォーナー演出)やケネス・ブラナ・カンパニーによる『ロミオとジュリエット』(ロブ・アッシュフォードおよびブラナ演出)などを視察した。

(3) 文献調査

日本およびヨーロッパにおける異性装の伝統に関して大変興味深い研究を発見したため、日本社会において長い伝統を持つ女装および近世ヨーロッパにおける男装の伝統を歴史的に調査し、日本とヨーロッパの歴史的・社会的な相違が現代の異性配役上演の受容にどのような影響をおよぼしているかを検証した。三橋順子著『女装と日本人』(講談社、1960年) Rudolf M Dekker and Lotte C van de Pol, *The Tradition of Female Transvestism in Early Modern Europe* (Macmillan, 1989)など歴史上および地域の文化上での女装および男装に関する文献を調査した。歴史的・文化的背景は、異性配役上演を受け入れる土壌を理解し、現代の演劇作品の受容、観客の形成を分析する上で役立つ。

また、SFというジャンルが確立されつつあった20世紀初頭より、ギリシャ神話のアマゾン族のような単一性のみによる社会が夢想されたことに着目し、イギリスにおけるオールフェイメル上演の文化的な原点として調査を行った。特に1970年代にはフェミニスト・ユートピア文学として「女性のみの社会」が描き出されたが、同時期に演劇界ではオールフェイメルのフェミニスト劇団が複数設立されたことは興味深く、調査の幅を広げることとなった。

(4) 個々の公演、劇団に焦点を当てた研究

ジェラルド・プレスギルヴィックによるミュージカル版『ロミオ&ジュリエット』は世界中で上演されてきたが、各々の国の言葉で上演されるにあたり、演出だけではなく内容的にも改変されている。つまり、ローカリゼーションが行われており、各々の国における受容の多様性を理解するために重要な研究対象である。日本における小池修一郎演出の改作上演には、宝塚歌劇団によるオールフェイメル版と東宝の男女混合版が存在し、そ

れぞれ異なった作品となっている。男女混合版の観客とは異なった、オールフェイメイル版の観客を解明するために、前述したアンケート調査や両公演における観客のブログ、劇評を調査した結果、宝塚歌劇団版における内輪のジョーク的な笑いや、ロミオの表象の特殊性の意味が理解できた。

彩の国さいたま芸術劇場のオールメイルシェイクスピア上演による『じゃじゃ馬馴らし』(2010年、蜷川幸雄演出)と男優のみの劇団スタジオリフによる同作品(2010年、倉田淳演出)における女性表象を比較した。特に、日本におけるオールメイル人気と女装に対して寛容な日本文化にも考察を深めた上で、同じオールフェイメイル上演でも対照的な2作品を比較した。特に、前述のとおりファンクラブに支えられたスタジオリフの人気「女方」林勇輔が演じるリージー・ディクソン(クリストファー・スライの女性版)と、歌舞伎俳優市川亀次郎(現猿之助)演じるケイトの表象と、観客側の受容を論じた。2016年にイギリスのロンドンとストラットフォード・オン・エイボンにて開催された第10回世界シェイクスピア会議にて発表を行った。

イギリスにおけるオールフェイメイル上演を歴史的・文化的に調査した。イギリスのオールフェイメイル上演は、1970年代のフェミニスト劇団によるフェミニズムの実践として始まった。当時のWomen's Theatre Groupの流れを汲むSphinx Theatre Company(現在は男女混合上演)現在イギリス国内で唯一のオールフェイメイル劇団であるSmooth Faced Gentlemenまで、オールフェイメイル上演の変遷を調査した。そして、昨今のオールフェイメイル上演のメインストリーム化という現象を、イギリス社会の変化、つまりジェンダー・ベンディングに対する観客の許容度が増したことや、イギリス演劇界における女優および女性スタッフのジレンマを訴えたトニック・シアター・ムーブメント、観客としての女性の影響度の変化から探った。特に、1995年に主役の王をフィオナ・ショーが演じた『リチャード2世』(デボラ・ウォーナー演出)における賛否両論の受容とは異なり、ロンドンの商業地区で上演されたドンマー・ウェアハウス劇場のオールフェイメイルによるシェイクスピア・トリロジー上演が異口同音に称賛を集めた点に注目し、考察を行った。他にも、主役をマキシーン・ピークが演じた2014年の『ハムレット』(サラ・フランコム演出)のように、過去のフェミニスト劇団とは一線を画した公演の成功に見られる受容の変化を探った。以上を、2016年に日本演劇学会にて発表した。

フェミニスト・ユートピアおよびディストピア文学の系譜における「女だけの世界」と、イギリス演劇におけるオールフェイメイル上演の関連を考察している過程で、シェリー・S・テッパーの『女の国の門』(1988年)とい

うフェミニスト SF 作品が内在する洞察に注目した。この作品の提示した女性により支配された国、「ポスト」フェミニズムとも呼べる世界に内包された問題を検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

Kumiko Hilberdink-Sakamoto, Review article, *The Shakespearean Stage Space*, by Mariko Ichikawa, Cambridge: Cambridge University Press, 2011. Pp. xiii + 221. *Shakespeare Studies*, 査読あり、2015年、pp. 21-22

[学会発表](計 2件)

阪本久美子、「ドンマー・トリロジー」の社会的意義—現代イギリスにおけるシェイクスピア劇のオールフェイメイル上演、日本演劇学会2016年研究集会「シェイクスピア ローカル・グローバル」、京都産業大学(京都府京都市)、2016年12月4日

Kumiko Hilberdink-Sakamoto, Unproblematizing the Problematic?: two all-male productions of *The Taming of the Shrew* in Japan, the 10th World Shakespeare Congress, King's College London, UK, 2016年8月5日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 久美子

(HILBERDINK-SAKAMOTO, Kumiko)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号: 50319240